第23回国際がん登録学会に参加して

井上 真奈美
愛知県がんセンター研究所疫学・予防部

2001年10月3-5日に中米キューバの首都ハバナにおいて、第23回国際がん登録学会（IACR）が開催され、日本からは大島先生、田中先生（大阪）、岡本先生（神奈川）、早田先生（長崎）及び井上（愛知）の5名が参加いたしました。この学会のちょうど数週間前に、米国多発テロという思いもよらない事態が勃発しましたが、大半の参加者がこれを理由にキャンセルすることもなく、無事にとりおこなわれました。日頃政情からキューバに行くことの困難な米国からは、意外にもテロに屈せず例年通りの参加がありました。

今回の会議では、がん登録データの精度管理、がん対策プログラムの評価、がん登録データを用いた生存率解析、がん罹患死亡の記述疫学の他、子宮頚、前立腺、頭頚部がん、更に中南米のがん登録報告という、さまざまなテーマが用意され、その基調講演では、以前英国の生存率解析について全国協議会でも話題にとりあげられた英国のDr. Michel Colemanや、IACR開始の頃に南米コロンビアでがん登録立ち上げに貢献された米国のDr. Pelayo Correaの貴重なお話を伺うことができました。また、英語とスペイン語を同時通訳で行うという中南米ならではの会議でした。岡本先生はがん対策プログラム評価セッションの座長もされ、大活躍でした。

会場はキューバを代表する大変立派な会議場で、同時に別の会議もいくつか開催されていました。が、会場が立派すぎたのか冷房が効きすぎ、冷凍庫のようでした。ある英国からの参加者は、現在の欧州の最低気温より寒いとコメントしていました。暖かい国の会議に参加するときの教訓となりました。

大半の参加者にとって、今回の会議でもっとも体力を消費したのは、渡航ルートを練ることだったと思います。例えば、日本からの場合、政治上の理由から、アメリカ大陸に入る際の表玄関となる米国からキューバへの直接のルートがないため、第3国を経由したり、1日でたどりつかないということもあり、渡航ルートの設定に苦労しました。さらに、テロのあおりを受け、予定便のキャンセルなど、予期せぬ変更をせまられました。しかし、キューバに到着しますと、思いのほか人々が明るくて友好的であり、つい米国のベールを介して物事を解釈しがちな日本からの参加者にとっては、意外な印象ではなかったかと思います。蛇足ですが、夕食時、旧市街へでますと、そこら中で3人ぐらいのバンドがキューバの音楽を演奏しており、ラテン気分を満喫できました。

来年は一転して、北欧フィンランドでの会議となります。テロの影響もおさまり、わが国から多くの方が参加されるよう希望します。

第10回JACR総会研究会（大阪）報告

津熊 秀明
大阪府立成人病センター調査部

大島理事長が会長となり、2001年9月14日大阪府医師会館で第10回総会研究会が、また前日の13日に大阪がん予防検診センターでがん登録実務者研修会が開催されました。「地域がん登録によるがん患者の生存率測定の意義」をテーマとした今回の総会研究会では、「個人情報保護法とがん登録」という我々がん登録関係者にとって最も関心の高い課題についても特別報告、教育講演がありましたので、有料参加者だけでも138人にのぼり大盛会でした。ポスター発表を含め、総会研究会の全発表内容がJACRモノグラフに収められ、近日中に発刊されますので、各講演・発表内容についてはそれを改めてお読み頂くとして、ここでは総会研究会での発表・討議を振り返りって私自身の感想を認めます。

地域がん登録が、がん対策の企画・立案と評価に必須の仕組みであるとの認識は、参会者全員に共通でありました。しかしがんの届出に際しては本人への説明と同意を得る努力をせよとの主張に賛同される方が、マスコミ人・法律家だけでなく、がん登録所管の行政官にもおられるようで驚きでした。医療機関からのがんの届出が病歴室などで、主治医の手を直接煩わせることなく実施されつつある状況下で、一々の患者から同意を得ることは非現実的であり、むしろ社会における認知とその具体的現れとしてのがん登録の法制化を強く求めてゆく必要があると感じました。

がん患者の生存率施設間格差のマスコミ報道やメディカルフロンティアでの「がん患者の生存率20%アップ」が打ち出されて以来、生存率への関心が高まっています。がん医療の成果を推し量る指標として、がん患者の生存率、とりわけ偏りの少ない地域がん登録で計測される生存率が大変重要であることに異論はありません。しかし生存率は集計対象や予後調査の精度、また相対生存率の基準となる期待生存率の計算方法等により、更には診断時期を間違いなく前進させるがん検診の普及等により、大きく変わる危うい指標でもあります。ともすれば数値が一人歩きする昨今、がん登録関係者は、生存率に関するこの辺りの問題点を正確に把握し、社会に対してきちっと説明ができるよう、研鑽しておくべきであると思います。

次回の第11回総会研究会は鳥取大学の岸本教授が会長を務められます。その頃までにはがん登録を取り巻く環境に前進があり、総会研究会で再会できますことを楽しみにしています。